

鳥取大学「一般英語」教育実態調査

— 報告と考察 —

筏 津 成 一, 岩 上 はる子, 岸 本 秀 樹
長 柄 裕 美, 吉 村 伸 夫, A・K・ケイツ

(1992年6月30日受理)

はしがき

大学教育の大綱化に伴い、英語教育もその見直し（変革）が求められている。こうした状況を踏まえて、本学教養部における英語教育の現状を把握し今後の改善に資する目的で、本調査は実施された。これは、学生および学部教官の英語教育に対する期待あるいは要望を、できるだけ正確に把握することが改革にとって必要不可欠であるとの認識に基づいている。

これまで鳥取大学における英語教育についての調査は、1986年に一度行なわれているが、最新の資料を得るために、ここで改めてアンケート調査を実施することは大いに意義のあることと考える。

調査は学部教官および学生の2種類に分けて行なわれた。学生アンケートに関しては、平成4年4月現在で教養部に在籍する全学部の2年次生および3年次生以上の全員を対象とした。また教官アンケートに関しては、各学部の助手以上の全教官を対象とした。

以下の報告は二部で構成される。第一部では学生アンケートの結果と考察、第二部では教官アンケートの結果と考察をまとめている。各部の冒頭に、質問項目とそれに対する単純集計結果および比率を示した。さらに巻末に学部教官から寄せられた意見を収録した。

〈目 次〉

はしがき

第一部 (学生アンケート調査結果の分析)

資料：学生アンケート (質問項目と回答)

第1章 調査の概要

- 1) 全体像について
- 2) 入学目的について

第2章 英語との関わりから

- 1) 英語の好き・嫌い
- 2) 英語力
- 3) 英語を勉強する理由
- 4) 授業のテーマ

第3章 各コースの状況から

- 1) Aコースについて
 - (1) 満足度とその理由
 - (2) 教材
 - (3) 授業の進め方
 - (4) 履修動機
- 2) Bコースについて
 - (1) 履修状況
 - (2) 受講理由
 - (3) 満足度とその理由
 - (4) 授業の重点
- 3) Cコースについて
 - (1) 履修状況
 - (2) 受講理由
 - (3) 満足度とその理由

第4章 英語への取り組みについて

- 1) 英語学習の実態
- 2) 授業外での英語学習
- 3) 授業に望む
- 4) 英語と初習外国語との関係

第二部 (教官アンケート調査結果の分析)

資料1：教官アンケート (質問項目と回答)

第1章 調査の概要

第2章 調査結果の分析

- 1) 英語教育への関心と学生の英語力の評価について
- 2) 学生の英語を学ぶ動機および大学における英語教育の目的について
- 3) 外国語教育における英語教育の位置付けについて
- 4) 鳥取大学における英語教育の現状認識と改善策について

まとめにかえて

- (1) 学生と学部教官の目的意識のずれ
- (2) 授業への満足度と英語力の関係
- (3) 自らの積極的な努力が望まれる学生

資料2：教官アンケート (意見)

— ＊第一部＊ —

学生アンケート（質問項目と回答）

0：あなた自身について

1. 性別を答えて下さい。	994（回答総数）
(1) 男	773 (77.8%)
(2) 女	221 (22.2%)
2. 何年生ですか。	993
(1) 2年生	884 (89.0%)
(2) 3年生以上	107 (10.8%)
3. 所属学部及び学科を答えて下さい。	993
(1) 教育学部(教員)	137 (13.8%)
(2) 教育学部(総合)	35 (3.5%)
(3) 医学部(医進)	73 (7.4%)
(4) 医学部(生命)	2 (0.2%)
(5) 工学部(全学科)	477 (48.0%)
(6) 農学部(総合)	234 (23.6%)
(7) 農学部(獣医)	35 (3.5%)
4. 現役ですか浪人ですか。	992
(1) 現 役	654 (65.9%)
(2) 1 浪	274 (27.6%)
(3) 2 浪	38 (3.8%)
(4) 3浪以上	24 (2.4%)

5 & 6. 大学に入った目的または理由は何ですか。

第一のものを5欄に、第二のものを6欄に、一つずつ記入して下さい。

(5) 992	(6) 977
(1) 社会に出る前に、猶予期間を得るため	
153 (15.4%)	167 (17.1%)

(2) 幅広い教養やものの見方を養うため

143 (14.4%) 227 (23.2%)

(3) 親や周囲の期待に応えるため

20 (2.0%) 94 (9.6%)

(4) 大学を出ていないと社会的に就職や結婚などで不利だと思うため

111 (11.2%) 115 (11.8%)

(5) 専門の知識または資格を得て、将来それを生かした職業につくため

470 (47.4%) 153 (15.7%)

(6) 大学院に進学するため

22 (2.2%) 46 (4.7%)

(7) 勉強するのが好きなため

3 (0.3%) 11 (1.1%)

(8) クラブ活動などを通して多くの友人を求めるため

13 (1.3%) 117 (12.0%)

(9) はっきりした目的はない

57 (5.7%) 47 (4.8%)

I：あなたと英語のかかわりについて

7. 英語は好きな(得意)科目ですか。

	992
(1) は い	259 (26.1%)
(2) いいえ	414 (41.7%)
(3) どちらともいえない	315 (31.8%)

8. あなたの英語の力のなかで、次のどの技能がもっとも優れていると思いますか。

	954
(1) 聞 く	88 (9.2%)
(2) 話 す	42 (4.4%)
(3) 読 む	660 (69.2%)

- (4) 書 く 152 (15.9%)
 (5) どの技能も優れている 11 (1.2%)

9. あなたの英語の力のなかで、次のどの技能がもっとも劣っていると思いますか。

- 989
- (1) 聞 く 249 (25.2%)
 (2) 話 す 433 (43.8%)
 (3) 読 む 44 (4.4%)
 (4) 書 く 91 (9.2%)
 (5) どの技能も劣っている 170 (17.2%)

10. あなたの英語力は総合的には次のどれに当たると
 と思いますか。

- 993
- (1) 非常に優れている 7 (0.7%)
 (2) 優れている 52 (5.2%)
 (3) ふつう 422 (42.5%)
 (4) 劣っている 380 (38.3%)
 (5) 非常に劣っている 11 (5.0%)

11. 大学で英語を勉強する理由は次のどれですか。
 あなたに最も近いものを一つだけ選んでください。

- 993
- (1) 英語が専門科目の勉強に必要と思われるから 121 (12.2%)
 (2) 英語を通じて、外国の文化や社会の実情にふれ教養を高めたいから 81 (8.2%)
 (3) 日常に役立つように、話したり聞いたりする能力を身につけたいから 183 (18.4%)
 (4) 自分の将来(就職、大学院入試、留学など)に必要なと思うから 155 (15.6%)
 (5) 英語が必修科目になっているから 452 (45.5%)

12. 英語の授業のテーマとして、もっとも関心のもてるものを一つだけ選んでください。

- 501
- (1) 環境問題(自然破壊など) 161 (16.2%)

- (2) 社会問題(平和、人権、戦争など) 71 (7.2%)
 (3) 最新時事(ソ連邦の崩壊など) 128 (12.9%)
 (4) 風俗、文化 189 (19.1%)
 (5) 女性問題 11 (1.1%)
 (6) 言語とコミュニケーション 51 (5.1%)
 (7) 文学鑑賞(小説、伝記、随筆) 117 (11.8%)
 (8) 外国映画、劇のシナリオ 200 (20.2%)
 (9) 比較文化論 31 (3.1%)
 (10) 人生観や生き方 32 (3.2%)

Ⅱ-1: 履修状況について

13. 1年次にAコース(講読)、Bコース(外国人教師)、Cコース(LL)をどのような割合で履修しましたか。各学期を1単位とし、年間合計4単位までとして、該当する組み合わせを一つ選んでください。

982

	Aコース	Bコース	Cコース	
(1)	4単位	0単位	0単位	486 (49.5%)
(2)	3	1	0	115 (11.7%)
(3)	3	0	1	117 (11.9%)
(4)	2	1	1	88 (9.0%)
(5)	1	2	1	13 (1.3%)
(6)	1	1	2	7 (0.7%)
(7)	1	2	2	13 (1.3%)
(8)	2	0	2	103 (10.5%)
(9)	2	2	0	39 (4.0%)

14. 一年次に英語の単位はいくつ取得しましたか。

- 992
- (1) 4単位 827 (83.4%)
 (2) 3単位 91 (9.2%)
 (3) 2単位 38 (3.8%)
 (4) 1単位 26 (2.6%)
 (5) 0単位 9 (0.9%)

Ⅱ-2: 各コースについて

◎ Aコース(講読)について

15. 一年次のAコースの授業に満足しましたか。

979

- (1) 受けたクラス全てにほぼ満足した(一クラスのみ受講の場合を含む) 288 (29.4%)
- (2) 担当教師によって満足できたものとそうでないものとあった 337 (34.4%)
- (3) 受けたクラス全てに不満だった(一クラスのみ受講の場合を含む) 70 (7.2%)
- (4) 特に意見なし 284 (29.0%)

16. 15で(1)または(2)と答えた人へ、満足と感じた理由は何ですか。一つだけ選んで下さい。

624

- (1) 教材に関心が持てた 278 (44.6%)
- (2) 授業内容から知的刺激を受けた 90 (14.4%)
- (3) 授業方法に工夫があり学習意欲が湧いた 73 (11.7%)
- (4) 英語の読解力が伸びた 39 (6.3%)
- (5) 綿密な指導がなされた 19 (3.0%)
- (6) その他 125 (20.0%)

17. 15で(2)または(3)と答えた人へ、不満と感じた理由は何ですか。一つだけ選んで下さい。

358

- (1) 教材に関心が持てなかった 79 (22.1%)
- (2) 授業内容に知的刺激がなかった 56 (15.6%)
- (3) 授業方法に工夫がなく退屈だった 126 (35.2%)
- (4) 英語の読解力が伸びなかった 18 (5.0%)
- (5) 綿密な指導がなされなかった 11 (3.1%)
- (6) クラスサイズが大きすぎた 15 (4.2%)
- (7) その他 52 (14.5%)

18&19 Aコースで使用した教材はどのようなジャンルのものでしたか。一クラスのみ受講した人は18欄に、二クラス以上を受講した人はそのうちから二つを選んで、18欄と19欄の一つずつ答えて下さい。

(18) 971

(19) 820

- (1) 小説・詩・劇 417 (42.9%) 89 (10.9%)
- (2) 言語・コミュニケーション 184 (18.9%) 143 (17.4%)
- (3) 哲学・人生論 40 (4.1%) 35 (4.3%)
- (4) 歴史 41 (4.2%) 32 (3.9%)
- (5) 科学 38 (3.9%) 68 (8.3%)
- (6) 時事英語 72 (7.2%) 106 (12.9%)
- (7) 文化事情 122 (12.6%) 188 (22.9%)
- (8) 討論英語 7 (0.7%) 37 (4.5%)
- (9) 作文・総合教材 8 (0.8%) 28 (3.4%)
- (10) その他 42 (4.3%) 94 (11.5%)

20. Aコースの教材として、どのようなジャンルのものを望みますか。

979

- (1) 小説・詩・劇 304 (31.1%)
- (2) 言語・コミュニケーション 133 (13.6%)
- (3) 哲学・人生論 18 (1.8%)
- (4) 歴史 103 (10.5%)
- (5) 科学 95 (9.7%)
- (6) 時事英語 110 (11.2%)
- (7) 文化事情 114 (11.6%)
- (8) 討論英語 19 (1.9%)
- (9) 作文・総合教材 20 (2.0%)
- (10) その他 63 (6.4%)

21. Aコースで使用したテキストの英語の難易度についてどう思いましたか。

979

- (1) どれも易しすぎた 21 (2.1%)
- (2) どれも適切だった 541 (55.3%)
- (3) 易しすぎるものがあつた 83 (8.5%)

- (4) 難しすぎるものがあった 302 (30.8%)
 (5) どれも難しすぎた 30 (3.1%)
22. Aコースの授業はどのように進めたらよいと思いますか。 977
- (1) 文法などの解説を丁寧にして少量でも正確に読む力を養う 247 (25.3%)
 (2) 多量のものを速読することによって大意把握する力を養う 313 (32.0%)
 (3) 日本語を介さず英語による内容把握を目指す 229 (23.4%)
 (4) 学生を主体とした研究発表形式によって周辺の知識をも深める 48 (4.9%)
 (5) 分からない 137 (14.0%)
23. B、Cコースをひとつも取らなかった人は、その理由は何ですか。あなたに最も近いものを一つだけ選んで下さい。 501
- (1) 英語で話したり聞いたりするのは苦手だから 142 (28.3%)
 (2) 英語を読む力の方が必要だと思ったから 47 (9.4%)
 (3) 外国人やLLの機械が苦手だから 32 (6.4%)
 (4) Aコースのほうが単位が取りやすいと思ったから 104 (20.8%)
 (5) B、Cコースに応募したが、入れなかったから 28 (5.6%)
 (6) B、Cコースがあるのを知らなかったから 147 (29.3%)
- ◎ Bコース(外国人教師クラス)について
24. Bコースをとった理由は次のどれですか。あなたに最も近いものを一つだけ選んでください。 353
- (1) 英語で話したり聞いたりする能力を身につけなかったから 119 (33.7%)
 (2) 外国人教師の授業は初めてで興味があったから 102 (28.9%)
 (3) 外国人のものの考え方や見方を知りたかったから 10 (2.8%)
 (4) 先輩などに勧められたから 36 (10.2%)
 (5) 単位を取りやすいと思ったから 83 (23.5%)
25. 授業には満足しましたか。 361
- (1) 非常に満足 67 (18.6%)
 (2) ほぼ満足 176 (48.8%)
 (3) やや不満足 58 (16.1%)
 (4) 非常に不満足 16 (4.4%)
 (5) 特に意見なし 44 (12.2%)
26. 25で(1)と(2)と答えた人へ、その理由を一つだけ選んでください。 246
- (1) クラスに参加した充実感(英語を実際に使えて)があった 93 (37.8%)
 (2) 授業内容(取り上げた題材など)から知的刺激を受けた 56 (22.8%)
 (3) 英語の運用能力(聞く、話す)がついた 27 (11.0%)
 (4) 授業がよく分かった 37 (15.0%)
 (5) 英語を使うことに慣れた 30 (12.2%)
27. 25で(3)と(4)と答えた人へ、その理由を一つだけ選んでください。 86
- (1) 授業参加が負担(苦痛)だった 24 (27.9%)
 (2) 授業内容(取り上げられた題材など)に知的刺激がなかった 27 (31.4%)
 (3) 英語の運用能力がつかなかった 17 (19.8%)
 (4) 授業方法に工夫がなく退屈だった 14 (16.3%)
 (5) 課題が負担だった 3 (3.5%)

28. 授業では次のうちどの能力がもっとも身についたと思いますか。ひとつだけ選んで下さい。

	<u>386</u>
(1) 話す能力	55 (14.2%)
(2) 聞き取る能力	195 (50.5%)
(3) 英文を読む能力	39 (10.1%)
(4) 英文を書く能力	9 (2.3%)
(5) 何も身に付かなかった	88 (22.8%)

29. 外国人教師による授業では次のどれに重点を置いたらよいと思いますか。ひとつだけ選んで下さい。

	<u>419</u>
(1) 海外旅行で買物やホテル、レストランなどで困らない程度の会話能力を身につけること	185 (44.2%)
(2) 社会的なテーマについても、ある程度の議論ができるほどの会話能力を身につけること	87 (20.8%)
(3) 自由英作文の能力(自然な英語の表現力、まとまった内容を論理的に展開する能力)を身につけること	48 (11.5%)
(4) 国際感覚が身に付くように、知識や視野を拡大すること	98 (23.4%)

◎Cコース(LL)について

30. Cコースをとった理由は次のどれですか。あなたにもっとも近いものをひとつだけ選んで下さい。

	<u>280</u>
(1) 英語で話したり聞いたりする能力を身につけたかったから	76 (27.1%)
(2) LLの授業ははじめてで興味があった	82 (29.3%)
(3) 新しい教材(ビデオなど)に興味があった	12 (4.3%)
(4) 先輩などから勧められた	42 (15.0%)
(5) 単位を取りやすいと思ったから	67 (23.9%)

31. LLの授業に満足しましたか。

	<u>278</u>
(1) 非常に満足	42 (15.1%)
(2) ほぼ満足	137 (49.3%)
(3) やや不満	68 (24.5%)
(4) 非常に不満	5 (1.8%)
(5) 特に意見なし	25 (9.0%)

32. 31で(1)と(2)と答えた人へ、その理由を一つだけ選んでください。

	<u>184</u>
(1) マイペースで集中して訓練することができ、充実感があった	53 (28.8%)
(2) 授業内容(取り上げた題材など)から知的刺激を受けた	34 (18.5%)
(3) 英語の運用能力(聞く、話す)がついた	15 (8.2%)
(4) 授業がよく分かった	34 (18.5%)
(5) 英語の音声に慣れた	47 (25.5%)

33. 31で(3)と(4)と答えた人へ、その理由を選んでください。

	<u>85</u>
(1) 集中力を持続するのが難しかった	12 (14.1%)
(2) 授業内容に知的刺激がなかった	17 (20.0%)
(3) 英語の運用能力がつかなかった	22 (25.9%)
(4) 授業方法に工夫がなく退屈だった	25 (29.4%)
(5) 授業のレベルが高すぎた	5 (5.9%)
(6) 授業のレベルが低すぎた	2 (2.4%)

34. LLの授業の時間についてどう思いますか。

	<u>281</u>
(1) 短すぎる	8 (2.8%)
(2) 少し短い	23 (8.2%)
(3) ちょうど良い	132 (47.0%)
(4) 少し長い	80 (28.5%)

- (5) 長すぎる 37 (13.2%) 97 (30.7%)
- (4) とくにない 97 (30.7%)
- (5) その他 18 (5.7%)
35. LLの授業の重点はどこにもっともおくべきだと思いますか。一つだけ選んで下さい。
- 322
- (1) 会話文型練習 81 (25.2%)
- (2) 聞き取り訓練 194 (60.2%)
- (3) 発音矯正 38 (11.8%)
- (4) その他 7 (2.2%)
36. ビデオの利用についてどう思いますか。
- 310
- (1) 全然利用しなくて良い 4 (1.3%)
- (2) あまり利用しなくて良い 20 (6.5%)
- (3) ある程度利用してほしい 94 (30.3%)
- (4) 大いに利用してほしい 175 (56.5%)
- (5) わからない 16 (5.2%)
37. LL設備のもっとも改善すべきところは次のどれだと思いますか。一つだけ選んで下さい。
- 297
- (1) ブースの不良や故障を少なくする 74 (24.9%)
- (2) ブースを多機能化する 63 (21.2%)
- (3) 全員が一度に見られるような大型のビデオプロジェクターを設置する 38 (12.8%)
- (4) 教室の設備配置(調整室の位置など)をもっと工夫する 21 (7.1%)
- (5) 特にない 100 (3.7%)
38. LLの利用についてもっとも期待することは次のどれですか。一つだけ選んで下さい。
- 316
- (1) 授業時間以外にも利用できるようにする 81 (25.6%)
- (2) 予習・復習などに学生が使えるビデオ装置を設置する 23 (7.3%)
- (3) テープ(ビデオも含む)のライブラリを作る
- Ⅱ-3: 英語への取り組みについて具体的に
39. 入学時に比べて現在の英語の力はどのように変化したと思いますか。
- 991
- (1) 向上した 49 (4.9%)
- (2) 変わらない 228 (23.0%)
- (3) 低下した 603 (60.8%)
- (4) 分からない 111 (11.2%)
40. あなたは授業に予習して臨みましたか。
- 989
- (1) 十分に調べていった 38 (3.8%)
- (2) いちおう目を通した 258 (26.1%)
- (3) 自分の当たるときしか予習しなかった 409 (41.4%)
- (4) ほとんど予習しなかった 194 (19.6%)
- (5) まったく予習しなかった 90 (9.1%)
41. 入学前に比べて英語の学習量は次のどれですか。
- 992
- (1) 増えている 39 (3.9%)
- (2) 変わらない 115 (11.6%)
- (3) 減っている 837 (84.4%)
42. 大学の授業とは関係なしに、個人的に英語の新聞、雑誌、本などを読みますか。
- 992
- (1) ほとんど毎日読む 15 (1.5%)
- (2) 一週間に一度以上は読む 33 (3.3%)
- (3) 一月に一度くらい読む 69 (7.0%)
- (4) ほとんど読まない 342 (34.5%)
- (5) 全然読まない 533 (53.7%)

43. ラジオ、テレビなどの英語学習番組を利用して
いますか。 993

- | | |
|------------------|-------------|
| (1) ほとんど毎日利用する | 25 (2.5%) |
| (2) 週に一度くらい利用する | 41 (4.1%) |
| (3) 一月に一度くらい利用する | 43 (4.3%) |
| (4) ほとんど利用しない | 196 (19.7%) |
| (5) 全然利用しない | 688 (69.3%) |

44. 衛星放送、テレビ2カ国語放送、BBC、F E
N、VOAなどを利用して、生の英語に接する努
力をしていますか。 993

- | | |
|------------------------|-------------|
| (1) 毎日利用している | 17 (1.7%) |
| (2) ときどきしている | 101 (10.2%) |
| (3) あまりしていない (一月に数回程度) | 83 (8.4%) |
| (4) ほとんどしていない | 210 (21.1%) |
| (5) 全然利用しない | 582 (58.6%) |

45&46. 大学における英語の授業にあなたは何をも
っとも望みますか。第一のものを45欄に、第二の
ものを46欄に記入して下さい。

(45) 989 (46) 983

- | | | |
|--|-------------|-------------|
| (1) 文法、構文、発音などの基礎訓練をやり直す
こと | 100 (10.1%) | 52 (5.3%) |
| (2) 英文を早く効率的に読む力を養成すること | 240 (24.3%) | 160 (16.3%) |
| (3) 手紙、レポート、レジュメなどを英語で書く
能力を身につけること | 76 (7.7%) | 130 (13.2%) |
| (4) 英語で聞いたり話したりする訓練を受けるこ
と | 410 (41.5%) | 261 (26.6%) |
| (5) 専門分野の論文を読んだり、書いたりするた
めの基礎訓練を受けること | 82 (8.3%) | 145 (14.8%) |
| (6) 専門にとらわれず、英語を媒介として広く知
識を身につけること | 81 (8.2%) | 235 (23.9%) |

47. 英語の成績評価について、全体的な印象は次の
どれですか 986

- | | |
|-------------|-------------|
| (1) たいへん厳しい | 67 (6.8%) |
| (2) やや厳しい | 230 (23.3%) |
| (3) 妥当である | 571 (57.9%) |
| (4) やや甘い | 93 (9.4%) |
| (5) たいへん甘い | 25 (2.5%) |

48. 英語のクラスの人数はどの位が適正と思います
か。 990

- | | |
|------------|-------------|
| (1) 20人以下 | 160 (16.2%) |
| (2) 21-30人 | 236 (23.8%) |
| (3) 31-40人 | 296 (29.9%) |
| (4) 41-50人 | 174 (17.6%) |
| (5) 51-60人 | 72 (7.3%) |
| (6) 61人以上 | 52 (5.3%) |

49. 英語を選択科目にすることについてどう思いま
すか。 986

- | | |
|---------------|-------------|
| (1) 賛 成 | 412 (41.8%) |
| (2) 反 対 | 186 (18.9%) |
| (3) どちらともいえない | 387 (39.2%) |

50. 外国語科目の中で英語はドイツ語、フランス語
などの初習外国語と比べてどのような関係にある
と思いますか。 986

- | | |
|--|-------------|
| (1) 英語が国際語として特別な比重をもち、他の
外国語を習う必要はない | 85 (8.6%) |
| (2) いずれの言語も学生個人の目的や好みに応じ
て選択されるべきであり、対等の関係にある | 439 (44.5%) |
| (3) いずれも必要であることに変わりはないが、
英語が第一外国語である | 435 (44.1%) |
| (4) 英語はすでに学んだので、今後は他の外国語
を学ぶべきである | 27 (2.7%) |

第Ⅰ章 調査の概要

1) 全体像について

*アンケート回答率は80%

今回、調査の対象となったのは、平成4年4月現在で教養部に在籍する全学部2年次生(1,063名)および3年次生以上(179名)の合計1,242名である。質問は50項目からなり、一肢選択として、マーク・カードに記入する方法で行なわれた。なお医学部生命学科生は米子キャンパスのため、調査が行えなかったため、以下では医学部に関しては医進課程の結果を基にしている。回答総数は994で、これは在籍者数のおよそ80%にあたる。(2年次生の内訳は表1を参照)

表1 学生数(教養部在籍2年次生以上)

平成4年4月現在

		教育学部	医学部	工学部	農学部	総計
2年次生		182 (100)	120 (49)	484 (49)	277 (49)	1,063 (100)
留年 生	1	12 (2)	9 (0)	94 (0)	17 (1)	132 (3)
	2	4 (0)	2 (0)	30 (0)	11 (1)	47 (1)
	小計	16 (2)	11 (0)	124 (0)	28 (2)	179 (4)

() は女子

2) 入学目的について(Q5, 6)

*上位3位は「専門知識」「猶予期間」「教養」

入学目的について、次の9項目から2つ選ぶという質問であった。

- 1 社会に出る前に、猶予期間を得るため
- 2 幅広い教養やものの見方を養うため
- 3 親や周囲の期待に応えるため
- 4 大学を出ていないと社会的に就職や結婚などで不利だと思うため
- 5 専門の知識または資格を得て、将来それを生かした職業につくため
- 6 大学院に進学するため
- 7 勉強するのが好きなため
- 8 クラブ活動などを通して多くの友人を求めるため
- 9 はっきりした目的はない

結果は図1に示した。第1目的と第2目的では順序は逆転するが、両者を合計すると「専門」31.6%、「教養」18.8%、「猶予」16.3%という結果で、上位3位に変わりはない。なお第1と第2

の組み合わせとして多かったのが「専門」と「教養」163名、「専門」と「クラブ活動」67名、「教養」と「専門」58名であった。

学部別に見ても「専門」が1位で、特に医学部（医進）86.3%，農学部（獣医）85.7%，教育学部（教員）50%と高い数値を示した。それに対し教育学部（総合）34.3%および農学部（総合）39.6%という結果であった。具体的な資格の取得をともなう学科では、明確な目的意識があるのは当然ともいえる。その一方、大学を社会にでる前の猶予期間と考える学生もかなり見られた。

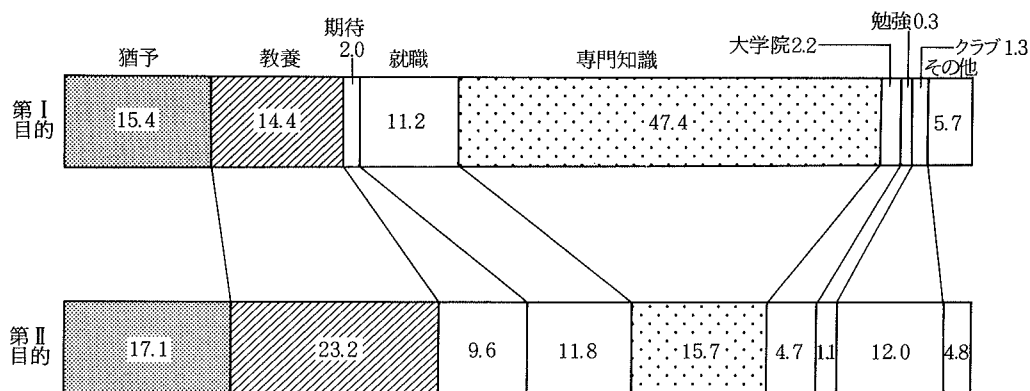


図1 大学入学目的調べ

第2章 英語との関わりから

1) 英語の好き・嫌い

＊「好き」は全体の4分の1

「英語は好き（得意）な科目ですか」という質問（Q7）に対して、「はい」26.2%，「いいえ」41.9%，「どちらでもない」31.9%の結果であった。これを例えば50人のクラスでみると、13人が「好き」であり、21人が「嫌い」であり、残り16人が「どちらでもない」と感じていることになる。

男女別では「好き」と答えた男子は24.2%であったのに対し、女子は33.2%とやや上回った。学科別では「好き」の順位は、農学部（獣医）47.1%，医学部（医進）43.8%であった。これに対し「嫌い」の順位は教育学部（総合）51.4%，農学部（総合）49.1%，工学部41.7%であった。

2) 英語力

＊「ふつう」「劣る」が全体の8割

英語の総合力の自己評価について（Q10）は「ふつう」が42.5%，「劣る」が38.3%で、全体の

約8割を占めていた。なお「非常に劣る」は13.2%, また「非常に優れている」は0.7%であった。

学部別では農学部(獣医)の62.9%および、医学部(医進)の52.1%が「ふつう」と自己評価し、「劣っている」(それぞれ20.0%と21.9%)を大きく上回った。教育学部(教員)と農学部(総合)では「ふつう」は「劣る」をわずかに上回り、工学部と教育学部(総合)では「劣る」が「ふつう」より若干多かった。

＊優れた技能は「読む」、劣った技能は「話す」

4技能のうち優れたものと劣ったものについて(Q8, 9)は、予想通りの結果であった。優れているのは「読む」69.2%が最も多く、以下の「書く」15.9%, 「聞く」9.2%, 「話す」4.4%を大きく上回った。

逆に最も劣った技能では「話す」43.8%, 「聞く」25.2%, 「書く」9.2%, 「読む」4.4%の順であった。なお「すべてに劣っている」と回答した者は17.2%いた。「話す」「聞く」を劣っていると考えている者の合計69.0%は「読む」を優れていると答えた者69.2%とほぼ同数である。ここでも「読む」と「話す、聞く」が対極にあることが裏付けられた。

3) 英語を勉強する理由 (Q11)

＊「必修だから」が第1位

英語を勉強する理由について、以下の5項目から1つだけ選択するという設問であった。

- 1 英語が専門科目の勉強に必要と思われるから
- 2 英語を通じて、外国の文化や社会の実情にふれ教養を高めたいから
- 3 日常に役立つように、話したり聞いたりする能力を身につけたいから
- 4 自分の将来(就職、大学院入試、留学など)に必要なと思うから
- 5 英語が必修科目になっているから

「必修」45.5%が筆頭で、以下「日常」18.4%, 「将来」15.6%, 「専門」12.2%, 「教養」8.2%の順であった。

第1の理由が「必修」という点はいずれの学部でも変わりはない。全体の半数近くが英語は「必修」なのでやむをえず(?)というのが本音のようである。あえて積極的な理由を見いだすならば、ある程度「話したり聞いたり」したい、あるいは「将来の仕事で必要になる」と漠然と感じているようである。専門課程に進んでから必要になるという自覚は薄く、また英語が異文化理解や国際感覚を深めることになるという意識も低いことが感じられる。

ちなみにQ49で英語を選択科目にすることについて賛否を問うところ「賛成」41.8%に対して、「反対」はその半数以下の18.9%であった。(「どちらともいえない」は39.2%) Q11とQ49の相関をみると、選択「賛成」の53.6%が、また「どちらともいえない」の46.3%が、英語を勉強する理由と

して「必修」と答えている。それに対して選択「反対」と答えた者の勉強理由は「将来」25.9%、「必修」25.4%、「日常」24.3%と、ほぼ均一な結果を示した。英語の勉強に対して積極的な動機づけを欠いている者に、選択「賛成」の声が多いことがわかる。

最後に学部別に多少の違いがあるので触れておく。医学部（医進）では「必修」31.5%、「専門」23.3%であり、教育学部（総合）では「必修」31.4%、「日常」「将来」ともに25.7%という割合であった。英語が「好き」で英語力は「ふつう」と答えた数が最も多かった農学部（獣医）が「必修」57.1%で、他学部より多かったのは意外な結果であった。

4) 授業のテーマ (Q 12)

＊英語の授業に期待するのは娯楽か

授業のテーマとして次の10項目の中からひとつ選ぶという設問であった。

- | | |
|--------------------|------------------|
| 1 環境問題（自然破壊など） | 6 言語とコミュニケーション |
| 2 社会問題（平和、人権、戦争など） | 7 文学鑑賞（小説、伝記、随筆） |
| 3 最新時事（ソ連邦の崩壊など） | 8 外国映画、劇のシナリオ |
| 4 風俗、文化 | 9 比較文化論 |
| 5 女性問題 | 10 人生観や生き方 |

全体的に圧倒的な多数を占めたものではなく、多様性を窺わせた。結果を示すと「映画」20.2%、「風俗」19.1%、「環境」16.2%、「時事」12.9%、「文学」11.8%、以下「社会」7.2%、「言語」5.1%、「人生」3.2%、「比較文化」3.1%、「女性」1.1%の順であった。

1位の「映画」であるが、実際には映画や戯曲を読んだり聞いたりするには、かなり高度な英語力が要求される。だが英語を「好きでなく」「劣っている」と答えた人に、「映画」の希望者が多かったことから、娯楽を期待しているようにも見受けられる。2位になった「風俗」も、Q11での英語を勉強する理由で「外国文化」をあげた割合が低かったことを考えると、海外旅行の情報といった程度の、軽い内容を期待しているのではないかと想像される。3位の「環境」や4位の「最新時事」は、タイムリーなテーマとして支持されているようである。だが関連性のある平和、人権、戦争などを取り上げる「社会問題」は6位と低迷しているところを見ると、あまり深い問題意識は感じられない。全体的な印象として、軽く楽しめる題材が好まれ、堅い内容で思索を伴うものは敬遠される傾向がみられる。

反面、このことは今日の学生が英語に対して以前にもまして、具体的で身近な意識をもっていることを示している。映画、旅行、時事といったより日常的な状況において、情報として伝わってくる生の英語に対する関心が強いことがわかる。視覚的なメディアを通して英語に触れる機会が増大している今日、学生の外国語に対する意識も、かつての読むことを中心とした外国語から変化していることが窺われる。

第3章 各コースの状況から

1) Aコースについて (Q15-23)

Aコースは、英語で書かれた小説・劇等, 言語・コミュニケーション, 文化事情, 科学等に関するエッセイ, また時事・国際情勢等に関するレポートなど様々な教材を使って, 幅広い読解力を養成し, 併せて国際的な視野から異文化とその背景を理解させることを目的としている。学部学科別に受講クラスが指定されている。B, Cコースを選択しない学生は自動的にAコースを取るようになる。

(1) 満足度とその理由 (Q15-17)

*意外に高い満足度

Aコースの満足度は, 図2に見られるように比較的高いことがわかる。「すべて」または「一部に満足」(Q15-(1), (2))は, 全体の63.8%に上る。それに対して「すべてに不満足」は7.2%に過ぎない。満足の理由を問うたQ16の回答者総数624名は, 不満足の理由を問うたQ17の358名を大幅に上回っている。学部別に見てもこの傾向は変わらない。特に医学部(医進)では「すべてに満足」は41.4%で, 「すべて」または「一部に不満足」(Q15-(2), (3))を大きく上回っている。

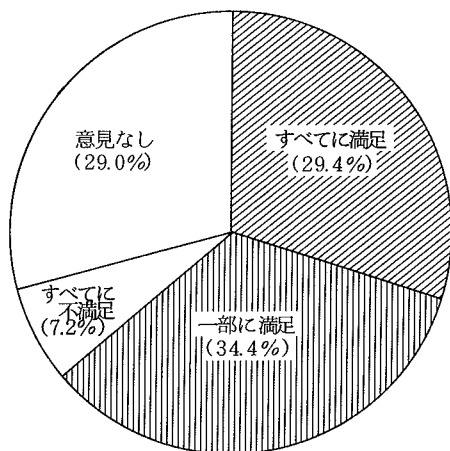


図2 Aコース満足度 (総数979名)

満足の理由は, 「教材に関心が持てた」が最も多く44.6%と圧倒的で, 続いて「授業内容から知的刺激を受けた」が14.4%である。この傾向は, 全学部を通じてほぼ共通している。これに対して「読解力が伸びた」, 「綿密な指導がなされた」はそれぞれ6.3%, 3.0%と低くなっているが, 反面, 不満足の理由でも「読解力が伸びなかった」, 「綿密な指導がなされなかった」はそれぞれ5.0%, 3.1%と低い数値を示した。このことから学生のAコースに対する期待は, 「読解力の増進」というよりは, 教材の内容から興味のある情報を得ることにあるようである。

不満足の理由としては, 「方法に工夫なく退屈」の35.2%が, 「教材に関心が持て

なかった」の22.1%を上回っている。満足の第一理由であった「教材への関心度」は、不満足の理由としては2番目に留まり、かわって第1位に「工夫なく退屈」があげられたことは、いかに興味ある教材を選んでも、授業に工夫がなければ、やはり学生の「不満」に結び付くということであろう。

(2) 教材 (Q 18-20)

＊使用教材と希望教材の順位は一致

上の結果からも「教材」は、授業の満足度と大きく関連している。授業で使用されている教材については、図3のような結果が出た（Q18とQ19を総合したもの）。最も多いものは「小説・詩・劇」の28.3%，次いで「言語・コミュニケーション」18.3%，「文化事情」17.3%の順であり、これが教材の3本柱であることがわかる。ただし、英語教員による使用テキストの調査（生協書籍部の資料による）によれば、「小説等」のジャンルに属するものは約20%であり、学生の考える「小説等」は、やや広範囲のものを含んでいるように思われる。学部別に見ると、工学部・農学部（総合）では比較的教材がバラエティ豊かだが、医学部（医進）・農学部（獣医）・教育学部ではジャンルに偏りがあることがわかった。これは学生数と開設クラス数が少ないための必然の結果であり、今後なお調査を重ねる必要があると思われる。

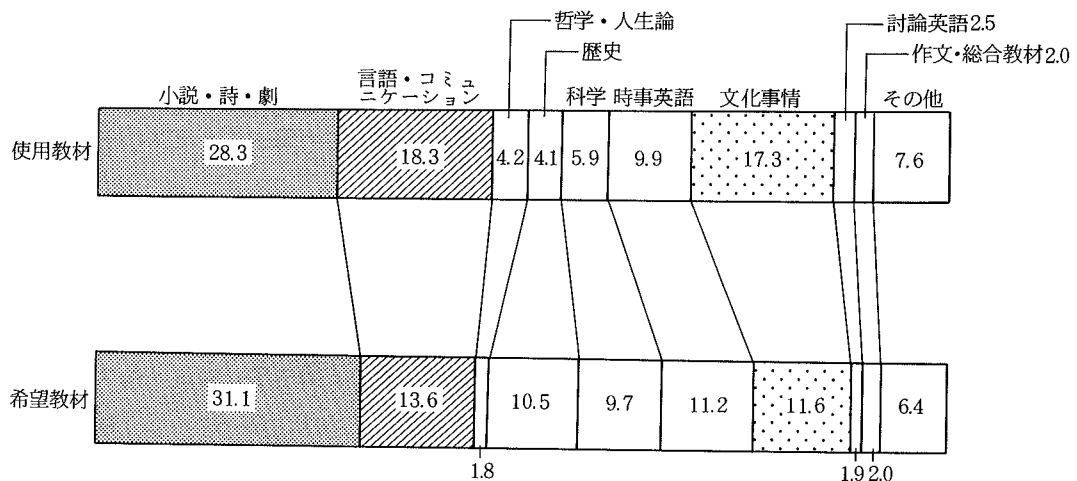


図3 教材調べ

次に希望教材について見る。図3からわかるように、最も多いものは「小説等」、次いで「言語等」、「文化」、「時事」、「歴史」、「科学」の順であり、上位3位は使用実績に一致している。これは、使用教材の現状は学生の関心に比較的そったものであることを示している。さらに詳しく見れば、

1位の「小説等」は実績の28.3%を越えて31.1%にのぼり、全学部共通して希望の1位にあがっていることがわかった。また全般的に見て、「小説等」以外のジャンルに関しては、上位6位まで10%前後で推移している。使用実績に比べて学生の関心はさらに多様であり、バラエティーに富んでいることがわかる。

使用教材の難易度に関しては、「適切」の回答が55.3%と全体の半数を越え、次いで「一部難しすぎるものがあつた」が30.8%である。学部別に見てもこの順位は共通であり、特に医学部（医進）と農学部（獣医）では「適切」の回答者が7割を越えている。全般的に見て、難易度は適切であり、学部別の学生レベルに合わせた教材が選択されていることが読み取れる。

(3) 授業の進め方 (Q22)

＊速読を中心に学部・学科による格差

授業の進め方の希望については、最も多いのは「多量速読」で32.0%、次いで「文法等の解説を伴う精読」25.3%、「英語による内容把握」23.4%の順である。学部・学科別に見るとこの上位3項の分布は様々で、以下の特徴を表している。教育学部（総合）では「速読」と「精読」の回答が多いのに対して、医学部（医進）・農学部（獣医）では「速読」と「英語による把握」に偏る傾向が認められる。また教育学部（教員）・工学部・農学部（総合）では、3項目にわたってほぼ均等に分布している。

英語は好きな（得意な）科目かどうかを問うたQ7との関連を見る。「好き（得意）」と答えた学生は、「速読」の次に「英語による把握」を希望し、「嫌い（不得意）」と答えた学生は「精読」を希望している。授業においては教材のみならず、その進め方に関しても個々のクラスのレベルに合わせて工夫することが必要であろう。

(4) 履修動機 (Q23)

＊Aコースの履修は非主体的か

他のコースを選択しないでAコースを履修した理由について見る。最も多いのは「他コースの存在を知らない」の29.3%、ほぼ並んで「話したり聞いたり苦手」の28.3%、次いで「単位が取り易い」の20.8%であり、積極的に「読む力が必要だ」は9.4%に過ぎない。（「コースの存在を知らない」とする回答には重要な問題を含むが、授業以外の要素が大きいのでは問題にしない。）大学で英語を学ぶ理由を問うたQ11で、「必修科目だから」が45.5%と他を大きく引き離して1位にあがっていることを考えあわせると、Aコースの履修は受動的で目的意識の希薄なものと考えざるを得ない。

動機づけの薄さは、講読を主体としたAコースの授業に対しても「読解力の増進」をあまり主眼

においていないという先の結果とも符号する。Aコースはその高い満足度にもかかわらず、今後の在り方についてなお検討の余地を残していると思われる。

2) Bコースについて

(1) 履修状況

Bコースは外国人教師による、実践的な英語のコミュニケーション技術の習得を目指すものである。60名を定員として受講希望者を募集し、全学部で1, 2年合わせて12クラス開設されている。現在、外国人教師3名(専任1名, 非常勤講師2名)が担当し、授業はすべて英語で行なわれる。単に英語の運用能力のみならず、外国文化や世界の諸問題についてグローバルな意識を促進することも目標としている。

「聞く、話す」の要望の強い学生にとって、このような実践的訓練への需要は高いことが予想される。だが昨年(1991年)の履修実績で見ると、総募集定員(1年生の前後期)600名に対して、受講者は295名であった。なお300名あまりの受け入れ余裕があった。受講可能者数($1200 \times 2 = 2400$ 名)に対する受講比率はおよそ17%にすぎない。このような実態からみれば、学生は実践的な訓練を受ける必要性を感じながらも、実際にそのようなクラスを受講することには、あまり積極的ではない姿勢が窺える。

(2) 受講理由(Q24)

Bコースを選んだ理由は、第1が「英語で話したり聞いたりする能力を身に付けるため」33.7%, 第2位が「外国人教師は初めてで興味があったから」28.9%であった。いっぽう「単位を取りやすいと思った」23.5%, 「先輩に勧められて」10.2%であった。あまり積極的な動機をもたない者は3割にのぼっている。

いっぽう「外国人の考え方や意見を学ぶために」は、わずか2.8%に過ぎなかった。英語の勉強理由を問うたQ11で、「英語を通じて、外国の文化や社会の実情にふれ教養を高めたい」と答えた者が8.2%という低さであったことと符合する。コミュニケーションに対する学生の意識が表面的なものに留まり、異文化理解や国際感覚を深めることにまでは及んでいないのを感じさせる。

(3) 満足度とその理由(Q25-27)

*受講者の2/3が満足: 「充実感」および「知的刺激」

図4に示したように「ほぼ満足」48.8%, 「非常に満足」18.6%を合わせると、67%が満足していることがわかる。満足した者には女子が多く、また大半が英語を「優れている」と回答した者であった。

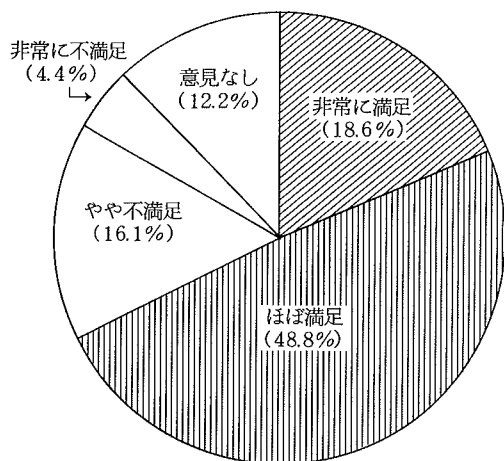


図4 Bコース満足度 (総数361名)

満足の理由は「英語を実際に使えて充実感があった」37.8%、「授業内容から知的刺激を受けた」22.8%が多かった。「授業がよく解った」「英語を使うことに慣れた」「運用能力がついた」は、いずれも10%代で平均していた。

つぎに不満と答えた人は、「やや不満」16%、「非常に不満」4%で、合計は20%であった。「授業内容に知的刺激がなかった」31.4%、「授業参加が負担だった」27.9%、「運用能力がつかなかった」19.8%、「授業方法に工夫がなく退屈」16.3%と続き、「課題が負担だった」は3.5%に過ぎなかった。

「知的刺激」は授業の満足度に大きく関係する。話す訓練を主眼においた授業でも、それが単なるトレーニングに終わっては学生を満足させえないことがわかる。これに対して「優れている」と答えた学生の80%が、「英語力が身につかなかった」ので、「不満」を感じている。

不満と答えた工学部学生の43.8%が「授業参加が負担」と感じていたことがわかった。また女子より男子の方が負担と感じている。英語力との関連でみると「非常に劣っている」と答えた学生の60%が、授業を負担と感じていた。ちなみに外国人教師による授業は、ある程度の英語力を備えた学生でなければ、その教育効果は期待できないようである。

*身についたのは「聞き取る能力」

外国人教師の授業を受けてどの能力が最も身に付いたかという点では、「聞く」50.5%が最も多く、2位の「話す」14.2%と大きな開きをみせた。それ以外では「読む」10.1%、「書く」2.3%という結果であった。また「何も身につかなかった」という回答は22.8%であった。

(4) 授業の重点

*ほとんどの学生が実践的な会話技術を希望

「海外旅行で買物やホテル、レストランなどで困らない程度の会話能力を身に付ける」を選んだ学生が44.2%にのぼった。次に「国際感覚が身につくように、知識や視野を拡大すること」23.4%、「社会的なテーマについても、ある程度の議論が出来るほどの会話能力を身につけること」20.8%、

「自由英作文の能力」11.5%であった。

3) Cコース (LL) について

(1) 履修状況

Cコース、一学年時の学生を対象に、各学部ごとにクラス65名を定員として募集している。授業は語学演習装置(LL)を活用して、テープやビデオなどの視聴覚教材を用いて、発音練習、聴解訓練、会話練習を中心に行う。

昨年(1991年)の履修状況は、総募集定員520名(前後期を含む)に対し、受講申込者は407名であり、100名以上の余裕があった。希望者はほぼ全員が受講を許可された。受講可能者数(1200名 $\times 2 =$ のべ2400名)に対する受講率は、Bコースと同じく17%に過ぎない。

(2) 受講理由

Cコースを選択した理由は分散したが、主要なところでは「LLの授業に興味があった」29.3%、「英語で話したり聞いたりする能力を身につけたかった」27.1%で、6割近くは目的意識をもっていることがわかる。それに対して「単位が取り易いと思ったから」は23.9%であった。実際の受講生のなかには、LL装置を初めて見るという人も多く、高校時代には経験しなかった授業への期待も感じられる。

(3) 満足度とその理由 (Q31-33)

* 高い満足度

図5に示したように、LLの授業に対する満足度はかなり高い。「非常に満足」、「ほぼ満足」を合わせると64.4%に達し、受講者の約2/3が満足していることがわかる。その主な理由は、「マイペースで訓練ができ充実感があった」28.8%、「英語の音声に慣れた」25.5%などで、講読の授業とは違った満足感があることがわかる。

「非常に不満足」または「やや不満」であると答えた者は、合計すると26.3%であった。その理由は「工夫なく退屈だった」29.4%、「運用能力がつかなかった」25.9

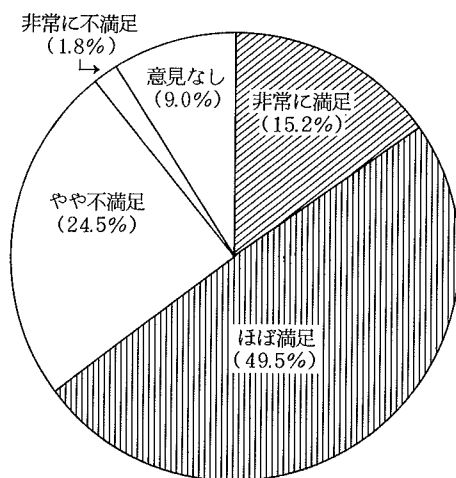


図5 Cコース満足度(総数278名)

％が約5割で、「知的刺激がなかった」は20.0％であった。ヒアリングや発音の練習は、単調な基礎訓練のくり返しとなる傾向がある。そのため練習に慣れてくると、次には飽きがくるという難点がある。訓練とは別に学生の知的興味を引き起こし、教材も複数のものを使用するなど工夫をこらし、授業の単調さをなくす努力が必要である。

第4章 英語への取り組みについて

1) 英語学習の実態 (Q39-41)

＊入学後の英語力：6割が「低下」

入学して1年後の英語力についての自己判断は「低下した」60.8％に対して、「向上した」はわずか4.9％という結果であった。また「変わらない」は23.0％であった。

入学以前の勉強量と比較した(Q41)場合、84.4％が「減った」と答えている。勉強量の減少は、授業に臨む姿勢(Q40)でみても裏付けられる。予習について「自分の当る時だけ」41.4％、「ほとんどしない」19.6％、「まったくしない」9.1％であった。7割に及ぶ学生は、積極的に授業に臨んでいるとは思われない。そうした状態でも8割以上が単位を取ることができ、その評価を8割以上が「妥当」ないし「厳しい」と感じている。(Q14, 47を参照)

2) 授業外での英語学習 (Q42-44)

＊9割近くが「ほとんどしない」

授業とは別に、各自が英語力の向上のためにどのような取り組みをしているかを問うたところ、概ね次のような結果であった。

- ・英語の新聞、雑誌、本などの講読：「ほとんど読まない」「全然読まない」が88.2％
- ・ラジオ、テレビなどの英語番組：「ほとんど利用しない」「全然利用しない」が89.9％
- ・英語放送の利用：「あまりしない」「ほとんど利用しない」「全然しない」：88.1％

授業のための準備も十分とはいえず、それ以外の努力もほとんどしないという学生の実態が浮かんでくる。

3) 授業に望む (Q45, 46)

大学での英語の授業に何を望むかを、次の6項目の中から2つ選択する設問であった。

- 1 文法、構文、発音などの基礎訓練をやり直すこと
- 2 英文を早く効果的に読む力を養成すること
- 3 手紙、レポート、レジュメなどを英語で書く力を身につけること

- 4 英語で聞いたり話したりする訓練を受けること
- 5 専門分野の論文を読んだり、書いたりするための基礎訓練を受けること
- 6 専門にとらわれず、英語を媒介として広く知識を身につけること

＊「聞く・話す」への強い希望

結果は図6に示した。第1希望としてあげられたのは「聞く、話す」41.5%、「速読」24.3%、「文法基礎」10.0%であった。第2希望としては「聞く、話す」26.6%、「知識」23.9%、「速読」16.3%であった。いずれの場合にも「聞く、話す」の希望が1位であることは変わらない。それは学部の違い、英語の好き嫌い、英語の能力に関わりなく、第1希望としてあげられている。なお第1希望と第2希望の組み合わせとして、最も多かったのが「聞く、話す」と「知識」で、2番目が「聞く、話す」と「速読」、3番目が「速読」と「聞く、話す」であった。

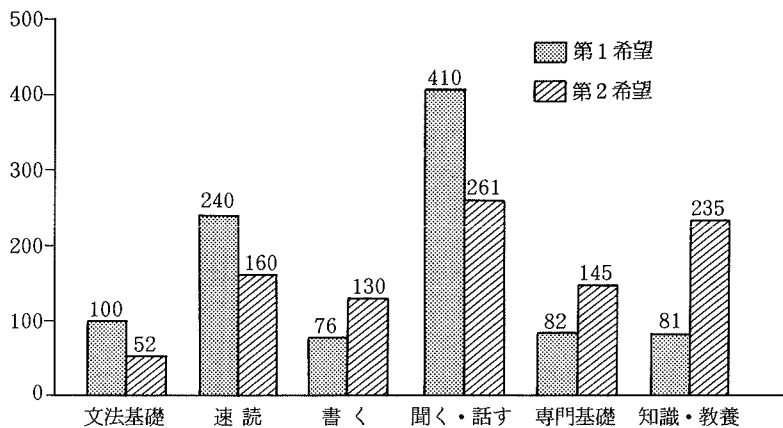


図6 大学英語授業に望むもの

「聞く、話す」に対する希望が多いことは予想された。しかしすでに指摘したように実際にB、Cコースではそれらの習得を目的とした授業が開設されているにもかかわらず、実際に受講している数は必ずしも多くはない。また4章2節で示したように、英会話の能力の取得のために個人的な努力をしている様子はみられない。さらに「聞く、話す」が意味する内容についても、Bコースについての調査結果によれば「海外旅行で困らない程度の会話力」をイメージしているものが多い。

次に2番目にあげられた「速読」について述べる。Aコースの解説で触れたように、「読む力が必要」と感じている人は、履修者の約9%に過ぎなかった。それでもここでは英語が「劣っている」また「ふつう」と答えた人は、「速読」を第2希望にあげている。「優れている」と答えた者も3番目にあげていることから、外国語の授業という場合、やはり「速読」の力は無視できないと感じているように思われる。

なお英語力について「やや劣っている」「非常に劣っている」と答えた者で、「文法基礎のやり直し」を望んでいるのはそれぞれ12.1%と16.9%で、3位に留まった。英語の基礎力に問題があると感じていても、基礎訓練をやり直すことには消極的なことがわかる。

3番目の「知識」について述べる。英語を「専門のための基礎訓練」として考えるより、「専門にとらわれず、英語を媒介として知識を」という希望の方が多かった。これはQ11で英語の勉強理由として「専門科目に英語が必要だから」という回答が12.2%に留まったことにも符合し、学生のなかで、英語を専門分野と結びつけて考える意識が薄いことが感じられる。しかし同時に指摘しておかなければならないが、Q11で「教養」と答えた者は、わずか8.2%であった。この矛盾した答えの意味するところは、英語の授業に対してあまり明確な目的意識はもっていないということになるのであろうか。

4) 英語と初習外国語との関係

「いずれの言語も学生個人の目的や好みに応じて選択されるべきであり、対等の関係にある」が44.5%で、「いずれも必要であることに変わりはないが、英語が第1外国語である」44.1%とほぼ同数であった。ちなみに前者は英語力について「劣っている」と答えた者に多く、後者は「優れている」「ふつう」と答えた者に多かった。

なお「他の外国語は習う必要はない」はわずか8.6%であり、逆に「他の外国語を習うべきである」とする者も2.7%と極めて小数であった。

—— *第二部* ——

〈資料1〉

教官アンケート (質問項目と回答)

1. 所属学部はどちらですか。 183 (回答総数)
- | | |
|----------|------------|
| (1) 教育学部 | 23 (12.6%) |
| (2) 医学部 | 70 (38.3%) |
| (3) 工学部 | 41 (22.4%) |
| (4) 農学部 | 49 (26.8%) |
2. 年齢は次のどれに該当しますか。 167
- | | |
|----------|------------|
| (1) 20 代 | 5 (2.8%) |
| (2) 30 代 | 40 (22.1%) |
| (3) 40 代 | 62 (34.3%) |
| (4) 50 代 | 51 (28.2%) |
| (5) 60 代 | 23 (12.7%) |
3. 自分の所属する学部の学生の入学時の英語の学力は、総合的に評価して、次のどれにあたると思っていますか。 167
- | | |
|--------------|------------|
| (1) 非常に優れている | 0 (0%) |
| (2) やや優れている | 21 (12.6%) |
| (3) 普通 | 73 (43.7%) |
| (4) やや劣っている | 60 (35.9%) |
| (5) 非常に劣っている | 11 (6.6%) |
4. 学生が学部に進級する時の英語の学力は、入学時と比較してどのように変化したと思いますか。 177
- | | |
|--------------|------------|
| (1) 向上した | 2 (1.1%) |
| (2) あまり変わらない | 46 (26.0%) |
| (3) 低下した | 66 (37.3%) |
| (4) わからない | 63 (35.6%) |
5. 学部において授業をする上で、学生の基礎的な英語力についてどのように思いますか。 175
- | | |
|--------------|------------|
| (1) 充分である | 1 (0.6%) |
| (2) なんとか間に合う | 60 (34.3%) |
| (3) やや不足している | 80 (45.7%) |
| (4) 大変不足している | 34 (19.4%) |
6. 学生が専門分野の英語の文献を読む場合、一番の問題点は何だと思いますか。 153
- | | |
|----------------------|------------|
| (1) 基礎的な英語力の不足 | 37 (24.2%) |
| (2) 英語に限らず一般的な読解力の不足 | 52 (34.0%) |
| (3) 背景となる専門分野の知識の不足 | 37 (24.2%) |
| (4) 語彙力(専門用語)の不足 | 21 (13.7%) |
| (5) その他 | 6 (3.9%) |
7. 学生は大学で英語を勉強する理由を、どのように考えていると思いますか。 53
- | | |
|-----------------------------|------------|
| (1) 専門課程のための英語の基礎学力充実のため | 35 (22.9%) |
| (2) 英語圏の社会、文化についての知識習得のため | 5 (3.3%) |
| (3) 英会話等の英語の実践的な運用能力習得のため | 12 (7.8%) |
| (4) 将来(就職、大学院入試、留学などで)必要だから | 19 (12.4%) |
| (5) 英語が必修科目になっているから | 82 (53.6%) |

8. 大学の語学教育（特に英語教育）について関心がありますか。 180
- | | | | |
|---------------------|------------|------------------------------|------------|
| (1) 以前からおおに関心を持っている | 70 (38.9%) | (3) 英会話等の運用能力を養成するクラスが不足している | 14 (37.8%) |
| (2) 少し関心がある | 85 (47.2%) | (4) 一クラスあたりの人数が多すぎる | 5 (13.5%) |
| (3) あまり関心がない | 20 (11.1%) | (5) 教官の専攻分野に偏りがある（例、英文学等） | 3 (8.1%) |
| (4) 全然関心がない | 4 (2.2%) | | |
9. 共通基礎科目として位置付けられることになった英語の教育は、主として何を目的に行われるのがよいと思いますか。 125
- | | | | |
|------------------------------|------------|--|------------|
| (1) 実際のコミュニケーション能力を養成する | 48 (38.4%) | 12. 現在の教養部の専任の英語教官数は外国人教師も含めて8名ですが、これは鳥大の学生数と比較して、どのように思いますか。 <u>147</u> | |
| (2) 専門科目を履修するのに必要な英語力を養成する | 65 (62.0%) | (1) 多い | 3 (1.7%) |
| (3) 英語圏の国々の社会、文化についての知識を習得する | 7 (5.6%) | (2) 適正である | 18 (10.1%) |
| (4) 英語検定、TOEFL等の資格を得する | 1 (0.8%) | (3) 少ない | 86 (48.9%) |
| (5) 英米の文学作品などを読むことによって教養を培う | 4 (3.2%) | (4) わからない | 70 (39.3%) |
10. 鳥大の英語教育の現状についてどのように思いますか。 178
- | | | | |
|-----------------------------|------------|--|------------|
| (1) 与えられた状況の中でかなりの努力がなされている | 6 (3.4%) | 13. 英語の1年間の総授業コマ数。91コマの内、専任は42コマ、非常勤は49コマを担当しています。このことを御存知でしたか。 <u>176</u> | |
| (2) 他の国立大学と同じく平均的である | 42 (23.6%) | (1) 知っていた | 20 (11.1%) |
| (3) 他の国立大学と比較して改善の余地がある | 43 (24.2%) | (2) 知らなかった（この場合、以前はどのように思っていましたか。次の中から選んで下さい） | |
| (4) よくわからない | 87 (48.9%) | (イ) 専任が圧倒的に多い | 96 (54.5%) |
| | | (ロ) 専任のほうがやや多めである | 46 (26.1%) |
| | | (ハ) 非常勤がもっと多い | 12 (6.8%) |
11. 上の10で(3)と答えた方に。最も改善すべき点は何だと思いますか。 37
- | | | | |
|--------------------------|------------|--|------------|
| (1) 教材の内容に偏りがある（例、文学作品等） | 10 (27.0%) | 14 専任と非常勤によって、学生に対する教育効果に違いがあると思いますか。 <u>179</u> | |
| (2) 教授法に偏りがある（例、訳読方式等） | 5 (13.5%) | (1) かなりある | 33 (18.4%) |
| | | (2) 少しある | 46 (25.7%) |
| | | (3) 関係なし | 43 (24.0%) |
| | | (4) わからない | 56 (31.3%) |
15. 現在、鳥大における英語のクラスの平均人数は約60～65名くらいですが、何名くらいが適正人数だと思いますか。 172
- | | |
|------------|------------|
| (1) 20人以下 | 51 (29.7%) |
| (2) 21～30人 | 47 (27.3%) |

(3) 31~40人	50 (29.1%)
(4) 41~50人	23 (13.4%)
(5) 51~60人	1 (0.6%)
(6) 61人以上	0 (0%)

16 現在の英語の成績評価についてどう思いますか。

	<u>136</u>
(1) 非常に厳しい	0 (00.0%)
(2) やや厳しい	10 (7.4%)
(3) 妥当である	47 (34.6%)
(4) やや甘い	49 (36.0%)
(5) 非常に甘い	12 (8.8%)

17 英語の授業で英検とかTOEFLなどの資格試験を取り上げて指導するべきだと思いますか。

	<u>175</u>
(1) 積極的に取り上げるべきである	16 (9.1%)
(2) 可能ならば指導して欲しい	67 (38.3%)
(3) 学生が個人的に勉強するべきことがらであるから必要ない	81 (46.3%)
(4) わからない	11 (6.3%)

18 外国語科目の中で英語はドイツ語、フランス語などの初習外国語とどのような関係にあると思いますか。

	<u>172</u>
(1) 英語が国際語として特別な比重をもっており、他は必要なし	12 (7.0%)
(2) いずれの外国語も学生個人の目的、好みに応じて選択されるもので対等である	34 (19.8%)
(3) いずれも必要であるが、英語が第一外国語である	126 (73.3%)
(4) 英語は既に長年学んできたので、他の外国語を学ぶべきである	0 (0%)

19 大学でいくつの外国語を学ぶべきだと思いますか。

	<u>169</u>
(1) 必要なし	3 (1.8%)
(2) 一つ	25 (14.8%)
(3) 二つ	130 (76.9%)
(4) 三つ以上	10 (5.9%)

20 英語を選択制にして、希望者のみを小人数クラスにして学習効率を上げる、という考え方についてどう思いますか。

	<u>171</u>
(1) 賛成である	22 (12.9%)
(2) 試みる価値がある	50 (29.2%)
(3) 反対である	86 (50.3%)
(4) わからない	13 (7.6%)

21 現在の英語の単位数（第一外国語の場合、8単位）についてどう思いますか。

	<u>172</u>
(1) 適正である	74 (43.0%)
(2) 増やしたほうがよい	47 (27.3%)
(3) 減らしたほうがよい	7 (4.1%)
(4) わからない	44 (25.6%)

22 専門科目における原書講読などを（制度的に可能ならば）英語の単位として読み替えることについてどのように思いますか。

	<u>177</u>
(1) 賛成である	48 (27.1%)
(2) 検討してもよい	84 (47.5%)
(3) 反対である	31 (17.5%)
(4) わからない	14 (7.9%)

23 英語の履修年次を1、2年次に限定しないで3、4年次でも履修できるようにする、という考え方についてどう思いますか。

	<u>175</u>
(1) 賛成である	64 (36.6%)
(2) 反対である	38 (21.7%)
(3) 条件つきで賛成である	62 (35.4%)
(4) わからない	11 (6.3%)

24 英語検定試験などの一定水準以上の資格試験合格者には全部、あるいは一部を英語の単位として認めるということについてどう思いますか。

	177
(1) 賛成である	57 (32.2%)
(2) 反対である	33 (18.6%)
(3) 条件付きで賛成である	62 (35.0%)
(4) わからない	25 (14.1%)

25 所属している学部全体として、今後の望ましい語学教育のあり方についてコンセンサスが得られると思いますか。

	176
(1) 容易に得られる	5 (2.8%)
(2) 何とか得られる	88 (50.0%)
(3) かなり困難である	35 (19.9%)
(4) その必要はない	7 (4.0%)
(5) わからない	41 (23.3%)

第1章 調査の概要

アンケート用紙は各学部の助手以上の全教官（415名）に配布した。回収総数は183部で、約44%の回収率であった。アンケートは一部選択方式を採用した。しかし、項目によっては選択肢の設定が必ずしも適切でなかったことから、複数で回答されたケースがあった。そうした場合には、その項目についてのみ無効回答とみなして処理を行った。そのため各質問によって、有効数は異なっている。なお文中の（ ）内の番号は、添付した教官の意見の番号を指しているので参照されたい。

第2章 調査結果の分析

1) 英語教育への関心と学生の英語力の評価について

英語教育への関心については「大いに関心がある」38.9%、「すこし関心がある」47.2%であった。合計すると86.0%で、英語教育への関心の高さがうかがえる。学生の入学時の学力については「普通」43.7%と「やや劣っている」35.9%（No.7）で、全体の約8割を占めている。2年間の教養課程を終えた学部進級時でみると、「分からない」35.6%を除くと、残りは「低下した」37.3%、「あまり変わらない」26.0%であった。教養課程での英語教育の成果はあまり肯定的には受けとめられていないようである。

学部で授業を受ける際の学生の英語力については「なんとか間に合う」34.3%に対して、「やや不足している」45.7%、「大変不足している」19.4%（No.14）となっている。約3分の2の教官が学生の基礎学力不足を感じていることがわかる。入学時の学生の成績を「劣っている」と感じた回答者の43.4%が、学部に進級する時に「更に低下している」と答えている。また入学時に「普通」43.7%と感じた回答者の約半数が「なんとか間に合う」と回答している。このことから、入学時の

学生の英語力に対する評価と、専門学部の授業における学生の英語力の評価との間には強い相関関係があると考えられる。

英語文献を読む上での問題点としては、日本語も含めた「一般的な読解力の不足」34.0% (No.28) が最も多く、ついで「基礎的な英語力不足」と「専門知識の不足」が同数で24.2%ずつ、更に「語彙力の不足」13.7%と続いている。ただし、この項目については複数回答のために無効になったものが8割近くあり、質問の設定の仕方に問題があったと思われる。複数回答が多かったことは、英語の読解力の不足には複数の要因が絡み合っていることを示していると解釈される。

2) 学生の英語を学ぶ動機および大学における英語教育の目的について

「学生が英語を学ぶ動機」についての認識は「必修だから」53.6%が半数を占め、「専門の勉強のため」22.6%がこれに続いている。1位については、学生のアンケート調査Q11の結果（「英語が必修となっているから」45.5%）とほぼ一致している。しかし2位の「専門の勉強のため」は、学生の調査結果では12.2%で、勉強理由の第4位であり、教官と学生の意識にズレがみられる。

英語教育の目的については、「専門科目を履修するのに必要な英語力の養成」62.0%、「実際のコミュニケーション能力の養成」38.0% (Nos. 9, 53) の上位2つの合計が100%となる。実際的な目的のために英語学習が必要であるという声は圧倒的である。また教官にとってのコミュニケーション能力は学会発表なども含んでいると思われるので (Nos. 14, 17), 「専門の必要性から」は実質的にはもっと高い比率を占めると推定される。

英語教育に対する関心度と目的意識の関係についてみると、「大いに関心がある」と答えた者の50%が「コミュニケーション能力」を1位にあげ、ついで「専門科目の履修のため」が43.5%となっている。この比率は関心度と反比例しており、関心度が低くなればなるほど専門科目のウエイトが高くなる傾向が見られる。ちなみに「全然関心がない」と答えた場合には、英語学習の目的を「専門科目の履修のため」とする答えが66.7%を占めていた。

これを学生の調査結果 (Q45, 46) と比較してみると、「英語で聞いたり話したりする訓練を受けること」41.5%、「英文を速く効果的に読む力を養成する」24.3%が1, 2位を占めており、「専門分野の論文を読んだり、書いたりするための基礎訓練を受けること」は8.3%という結果であった。また学生が求める「コミュニケーション能力」のレベルは、「海外旅行で買物やホテル、レストランなどで困らない程度の会話能力を身につけること」44.2%であり、目的意識において教官と違いのあることがわかる。

3) 外国語教育における英語教育の位置付け

英語、ドイツ語、フランス語の関係をみると「いずれも必要であるが、英語が第一外国語である」

73.3% (No46) である。「英語が国際語として特別な比重を持っており, 他は必要なし」(No12) は, わずか7%に過ぎなかった。また8割が「二つ以上の外国語を履修すべきである」と答えている (No23)。単位数について「8単位が適当」43%, 「もっと増やすべきである」27.3% (No49) で, 計7割以上が現状維持かもっと充実すべきであると考えていることがわかる。

Q20の「英語を選択性にして, 小人数クラスで教育効果を上げるべきかどうか」については, 「反対」50.3% (No52), 「試みる価値がある」29.2% (No19), 「賛成」12.9% (No42) と続いている。このことから, 学生全体の英語力の底上げを期待する立場と, 小数精鋭で実質的な学習効果を期待するという二つの立場があることがわかる。他方, 学生は選択制に「賛成」41.8%, 「どちらとも言えない」39.2%, 「反対」18.9%で教官とは違った傾向を示している。

4) 鳥大における英語教育の現状認識と改善策

鳥大の英語教育の現状について, 48.9%が「よく分からない」と回答しているのは, 予想された結果であった。残りについてみると「他の国立大学と同じ」23.6%と「改善の余地がある」24.2%が, ほぼ同数を占めている。改善のための具体的な方策として, 「会話等の運用能力を重視する」37.8% (No41), 「教材内容の偏り (文学作品等) を改める」27% (Nos. 5, 58), 「訳読偏重の教授法を改める」と「一クラスあたりの人数を少なくする」がともに13.5%であった。これを学生の調査結果に照らしてみると, 既にみたように「会話能力の養成」を希望する学生は多いが, 実際に英会話クラス, LLクラスを受講している人数は必ずしも多くないという結果がでている。(第一部の調査結果Q13およびQ23を参照)。この意味するところは, 希望はしてもその実現のための努力はしたがないという現代の学生気質であり, 大学教育が直面している問題点の一つと言えよう。

教材内容 (No20) に関しては, 「小説, エッセイ, 言語, 社会, 文化, コミュニケーション, 歴史, 時事英語」など多岐に渡っており (第一部, AコースのQ20を参照), 文学作品偏重とは言えないという結果が出ている。これは, 学生の教材に対するかなり高い満足度によっても裏付けられている (学生意識調査Q16を参照)。

英語の専任教官数については, 約半数の48.9%が「少ない」と答えている。非常勤講師の担当コマ数が全コマ数の半分以上を占めていることについては, 約8割が「知らなかった」と答え (No34), 専任が「圧倒的に多い」54.5%, 「やや多い」26.1%と思っていたと回答している。非常勤講師が半数を占めることによって生じる教育上の影響については, 約40%が「何等かの影響がある」と回答している。仮に影響があるとするならば, 個々の非常勤講師の教育者としての資質のばらつきとか熱意といった問題というより, 教育方針の徹底や授業改革等が能率的かつ効果的に行われにくいという運営上の問題であると思われる。

一クラスあたりの受講者数については, 「40人以下」, 「30人以下」, 「20人以下」の3区分がほぼ

同数で、その合計は約9割を占めている。40人以下であればいちおう許容範囲内ということになるが、そのためには現在よりも開設クラス数を増やす必要がある (No.39)。成績評価については、「非常に厳しい」と「やや厳しい」が合計7.4%、「妥当である」34.6%、「やや甘い」と「非常に甘い」の合計が44.8%である。約半数が評価を甘いと感じていることになる (No.5)。これは、もう少し厳しく指導して教育効果を上げて欲しいという教官の希望を反映したものであろう。また、この数値は学生自身の評価（「妥当である」57.9%、「やや甘い」と「たいへん甘い」が11.9%で、合計約70%）ともほぼ一致している。

資格試験指導は、「必要なし」が46%でほぼ半数を占めている。また原書講読の英語単位への読み替えは「賛成」27.1%、「検討してもよい」47.5%で今後の検討課題である。

履修年次の弾力化については条件付きを含めて72.0%の教官が履修年次を3、4年へと延長することに賛成と答えている。英語を3、4年次において継続学習することにより、その成果が専門の講義、あるいは大学院入試等に生かされることが期待されているようである (No.8, 29)。資格試験等を英語の単位に読み替えて、それに相当する分の単位を免除することについては、条件付きも含めて67.2%が賛成と答えており、現実的な英語力の評価システムの検討も求められている。

まとめにかえて

これまで、調査結果についてできるだけ客観的に報告してきた。結果を整理していくと設問の不備も目につき、また検討時間も十分でなく、どこまで現状を把握できたか疑問であるが、いくつか浮き彫りになった問題点をここにまとめておきたい。

1) 学生と学部教官の目的意識のずれ

英語学習の目的（授業への希望）として学生が第1にあげたのは、「日常的なコミュニケーション能力」の養成であった。続いて「速読」の能力と「専門外の教養知識」が並び、「専門教育の基礎力養成」を望む者は12%に留まった。これに対して学部教官のあいだでは「専門教育の基礎力養成」を望む声が62%と圧倒的に多く、第2位の「コミュニケーション」38%を大幅に上回った。またすでに述べたように、学部教官のコミュニケーションには学会発表なども含まれており、専門との結びつきで捉えられていることがわかる。

学生は入学目的としては「専門知識の習得」を第1位にあげている。だが教養課程での英語の授業に対しては、学部における専門の勉強に直接寄与するような授業内容を必ずしも期待してはいない。むしろ専門課程に進んでからでは接することのない教養知識への希望のほうが上位という結果であった。講読の教材としても文学、言語、文化といった人文的なものが求められ、専門との関連

性があると見られる科学関係への希望は必ずしも高くなかったことも、学生の趣向を裏付けるものといえる。

授業は学生の希望だけを主体に構成されるものではないとしても、ここでは調査結果から明らかになったこととして二つの点をあげておきたい。すなわち、学生の意識のなかでは英語と専門とは必ずしも結びつけ考えられてはいないこと、また学生の英語への期待は「聞く、話す」の実用的な能力をはじめとして、「教養知識」をも含む広範囲なものであることである。

2) 授業への満足度と英語力の関係

学生の授業に対する満足度はいずれのコースでも6割を越えていた。いちおう学生の希望に添った授業が行なわれているといえよう。しかしその一方、英語力の自己判断では6割強が入学時よりも英語力が低下したと答えている。英語力は低下したと感じながらも、授業には満足しているという回答をどのように解釈すべきであろうか。

Aコース（講読）に例を取ると、そこでは満足度を決定づけるものは「読解力」よりも、「教材への興味」や「知的刺激」であったことがわかる。また「聞く、話す」力の養成を目的としたB、Cコースにおいても、「知的刺激」が満足度を左右していることが報告されている。入学試験に合格するという限定された目的に縛られ、能率だけを重んじて英語の勉強をしてきた学生にとって、大学における英語への期待として、それまで二次的に過ぎなかった知的興味に応えるものというのは自然に思われる。

学部教官の三分の二が学生の英語力に不満を感じている現状を踏まえながらも、大学における英語教育の理想の姿として、学生の知的興味を満たし、なおかつ英語力の増進につながる授業を展開することが必要である。

3) 自らの積極的な努力が望まれる学生

学生の7割は授業に十分な予習をせずに出席している。またさらに9割近くは授業外で学習していないことがわかった。英語で「話す、聞く」力をつけたいと思いながらも、自らの積極的な努力はほとんどしていない。それらが物語るのは学生の怠惰であり、その奥にあるのは英語学習の動機づけの弱さである。

大学生に対しても学習の動機づけから始めなければならないのが、英語担当者にとっての現状である。その認識のもとに、今日の学生のものの考え方、価値観、社会環境などを理解し、時代に即した英語教育の刷新に努めなければならない。学生の学習意欲をそそり、刺激的な授業を作り出すための創意工夫が求められる。

今、一般英語は大きな改革の時期を迎えている。これまでの一般教育科目の枠組みを取り払い、学生、学部教官、英語担当者の三者の目標を統合し、各々の目的に応えられる英語教育の在り方を模索していくのが今後の課題である。そのためには、柔軟な発想によって英語教育を多面的に捉えていく必要があると考える。今回の調査を契機として、本学における英語教育に対する理解と関心が高まり、より実りある議論が展開できれば幸いである。

＊

〈資料2〉

以下に、アンケート末尾の所定欄に書き込まれた意見を示す。明らかな誤字、脱字、句読点については、読みやすいように処理したが、その他は書かれたままを収録している。なお所定欄以外に書き込まれたものも少数あったが、これらについては、紙数の都合もあるので割愛した。

〈教育学部〉

01：言語学の授業を設けて欲しい。文学作品だけを教材とするのではなく、他の分野のものを教材にして欲しい。すると、英文学科や英語科出身者の教官ばかりでなく、言語学・哲学あるいは科学史などを専門にやっていた人も英語の教官として迎えてはどうか、ということになる。もうこんな授業方法はほとんど取られていないと思うが、訳して終わりという訳読方式は考え直して欲しい。テーマを考えてグループ別に文献を捜して読み込んで来て発表しあうとか、アメリカやイギリスに何かの調査に行くとして、そのパンフレットを英語で作るとか、そういう活動的な授業も考えて欲しい。(30才代)

02：ジャーナリズム、国際経済（貿易）等の分野を専門とする英語担当教官を増やすべきである。独仏中韓国語などについてのアンケートも、やってみてはどうか。(30才代)

03：(Q23について) 専門科目の内容はある程度基礎知識が必要なので、3・4年次で履修してよい。

(以下の意見は、英語教室の責任ではありません。) 受験英語で教育されているため、学生が訳した文章は、日常あまり使用しない文章になっている。たとえば、"The experiment proves that..."を「実験で明らかになったことは」「実験は何々を明らかにした」。"The investigation carried out"を「何々を行なった」「何々が行なわれた」。論文では受け身をよく使うが、そのまま訳すと変になる場合が多い。(40才代)

04：時事英語も取り上げる必要がある。(40才代)

05：理系の多い大学で、文学作品など文系の教材で授業をしても、ほとんど役立つ英語は習得できない。理系の論文を読む場合でも、新聞英語であればまだ考え方が近く、国際理解・物の考えかたの見方にも一理がある。スラングを含むような作品、古典（文系の学生であれば理解できるが）など、すぐに止めた方がよい。英語論文を読むことにアレルギーを起こす学生が多いのは問題で、どうして教養課程を進級できたのか不思議な学生が多く、論理的に書かれた論文の理解ができていない学生が多い。文学は教官の趣味や嗜好でなされているのですか。(50才代)

06: アンケート結果の公表をお願いします。(50才代)

07: (Q16について)「選択肢6: 学生の実態をよく理解していない」を追加する。

鳥大へ来る学生の大半は、高校英語の落ちこぼれ組なのだから、今の本学の教育方法ではレベルが高過ぎて、彼らの英語力アップにはあまり効き目がないと思う。(50才代)

08: (Q20について) 選択性にしても、ほとんどの学生が受講するであろう。

(Q23について) 4年次でも履修できるようにすると、ドイツ語がそうになると予想されるのと同じく、4年次後期まで英語を取り残して、「就職も決まっている。英語の単位が出ずに卒業できないと困る」と言って来るものが、何人かは出て来る。(60才代)

〈医学部〉

09: 実際の会話として使いこなせるような英語教育が、必要だと思います。文法や机上での教育はある程度高校で受けているので、やはり外国の人とのコミュニケーションが取れるということが、大切ではないでしょうか。(20才代)

10: (Q20について) 質問意図が不明であるが、小人数クラスを選択で選ばせるという意味なら、試みる価値がある。

医学部では、卒業後すぐに欧文論文(英語)を読む必要性が生じる。いわゆる英語で“on the job training”を行なうわけであるが、一定程度の読解力と語彙が卒業前にすでに身につけていけば、指導する側も楽であるし、本人も貴重な時間を無駄にしないでいいと、常々思っている。(30才代)

11: 会話中心の教育が必要だと思います。(30才代)

12: (Q18について) 医学部の中のドイツ語の比重は、急速に低下しつつある。

(Q20について) 必修でないといけない。

今後ますます語学力は重要になるので、早急に教育体制の改善を実施して頂き、鳥大生全員が語学についてコンプレックスがないようにして頂きたい。医学部では、専門教育の中に語学(特に英語、フランス語)を入れる必要があります。(40才代)

13: 読むことと書くことは、相変わらず大切である。それと同等かそれ以上に、ある特定の人々には、話すことと聞くことが必要である。つまり、このような人々に集中的に英語教育をやるのも、一考の余地があると思います。(40才代)

14: 医学部においては英語は重要である。1, 学会発表 2, 留学 3, 論文作成

専門の論文を読む力に関してはすぐに慣れるのでよいが、上記1~3が不十分過ぎる。しかし、現在の英語教育は大学においても相変わらず読解のみ重視しているので、必要なことはまったく教えてもらっていない。(40才代)

15：履歴書・自己紹介など、すぐに必要なことに関して、まったく知識がない。自分の生年月日を西暦で言えない学生がほとんどである。高学年で履歴書が書ける者はまずいない。(40才代)

16：もし、専門学部の意向を考慮されるというなら、生きた英語を学んで欲しいと思います。(40才代)

17：英語の必要性は今後ますます増加することは確実であり、学会発表や論文作成が容易にできるような実践的教育を、検討すべきである。(40才代)

18：一肢選択のアンケートとしては、設問が未熟である。語学はある意味では人間（社会）コミュニケーション学であり、単純なものではない。もっと目的をよく絞って、設問を設けるべきである。英語という手段を用いて「人間とは何か」を考えさせる教育を、一般教育ではやって欲しい。(50才代)

19：(Q15について) 教育の行ない方においても、また目的においても違いますので、よく分かりません。

(Q16について) 成績評価の現況を、よく存じません。

昔のように原書に親しむということがなくなり、学生時代に外国語を習得する必然性を、学生が感じていないように存じます。専門課程における語学の必要性を、我々ももっと強調すべきだと思います。(50才代)

20：1，2年次ではスピーキングとライティング，3・4年次では専門を含めたリーディングに重点を置いたらよいとおもいます。(50才代)

21：(Q3について) 新任であり、評価できない。

(Q23について) 語学はつねに学習していないと能力が低下するので、常に馴染んでいる方がよいから、時間は少なくてもよい。英文を読んで書くことができるための英語教育が、必要だと思います(ミニマムとして)。

(50才代)

22：(Q6について) Q5の「その他」の内容として、“継続的な勉学意欲の不足”をあげたい。

英語は国際語であり、将来とも必修でありたい。内容はやはり時事英語が最優先されるべきで、文学その他の専門分野の英語は、専門課程に譲るのがよい。(60才代)

23：大学教育において、外国語の重要性はきわめて大きく、英語を第一外国語と位置付けるとしても、第二外国語についても、これに匹敵するくらいの実力を養成したい。(60才代)

〈工学部〉

24：英会話の講義をもっと取り入れてはどうか。(30才代)

25：(Q3について)「選択肢6：入学時の英語力を知らない」を追加する。

(Q5について) (1)へのコメント：授業では英語を使わないので。

(Q7について) 人により違うと思われる。

(Q13について)「選択肢2:何とも思っていなかった」を追加。

設問が複数の意味に解釈できる, 選択肢が全てを尽くしていないなど, 非常に回答しにくいアンケートである。コミュニケーションに携わっている教育者として, 再考されたい。(30才代)

26: 個人的な意見だけではなく, 学部・学科としての英語教育に対する要望も, 取り入れるべきである。(40才代)

27: 教養課程の英語だから英米文学作品の講読ということではなく, 各学部・各学科の専門に関する英語, あるいは技術英語の文献等の講読を行なうべきだと思う。学生もまた, より興味をもって取り組めるのではないか。(40才代)

28: 鳥大の英語教育は学生からの情報としてしか入手できないが, 地方大学の抱える問題として, 英語教育の選択肢の少なさを痛感するとともに, 我々が受けた時代の大学における英語(一般教養として)の内容の貧弱さが先入観としてあり, それらの持つ比重が大きく私にのしかかっている。それからすれば, もっと当時より改善されはしているが, 講義の中で英語を日本語に訳させても, 一つの日本語の文章として意味をなさない学生も多いことを考えれば, 日本語教育とくに文章を書く訓練が先なのかも知れません。(40才代)

29: (Q23について) 専門分野についての英語を3・4年次に配当するという条件で。

英語だけに限らず, 最近の学生に興味を持続させて勉学を続けさせるのは, 非常に困難な状況になっています。講義内容(教材・テーマなどについて, 専門的内容重視), 教授法(オーディオヴィジュアル機器の使用)などの工夫の努力が, 必要だと思います。もちろん, 各専門課程の先生方の協力を要請されることが, 必要だと思います。(40才代)

30: 比較的易しい英語(文学ではなく実用英語)を早く読めるような教育をして欲しい。(40才代)

31: The language "English" has two aspects as Japanese and other languages have ; one is a tool for the communication with other people and another is a tool with which technical works can be developed (the latter includes English in the literature).

1) Generally, in universities in Japan, English as a tool has not been emphasized. However for most students, it occupies large area in the motivation of English course in students' minds.

2) In the scientific use, English has been a common tool. The tool is easy to understand, but students have not studied the manual for the tool. I expect that students know the basic way to use the tool. (40才代)

32: 1. ドイツ語はいらない。 2. 仏中西朝語などを充実して欲しい。 3. 語学は, まず喋れることを念頭において授業をして欲しい。文学はそれから。(50才代)

33: ネバダ大学での学習を行なって, 試験にパスした学生には正式に単位を認めてはいかがですか。ネバダでの試験にパスしなかった学生には, 終了証書のみを与えればよいでしょう。(50才代)

34: Q13で、選任講師のコマ数が非常勤より少ないというのは、ショックでした。後者の割合は3分の1か4分の1であるべきではないでしょうか。(50才代)

35: しっかりやさしい英文が読めるようにして欲しい。(50才代)

36: 1. 英語の履修は、1～3年次に行なう。 2. コース制(英文学, 英会話, 時事英語, ノンフィクション, サイエンス, 専門など)にし、学生が色々なコースを自由に取りれるようにする。一種の選択制である。(50才代)

37: 現在の大学生を考えると、英語に限らず専門教科でも単に資格獲得のため(就職時の、大学卒という資格)のために講義に出ている者が多いが、一生懸命学力を身につけたいと思っている者がいることも、確かである。これらを一律に一つの教室に、出席簿によって分けて大人数教育をしていることが、(教員数の少ない状況では)とくに語学教育などでは問題ではなかろうか。教養部ではある程度自由選択として、英語のレベルも様々なものを作って、やる気のある者を小教集めて力をつけさせ勉強させるクラス、あまりやる気のない者は200人くらい集めて、それなりのレベルでほどほどにやって単位を与えればよいのではないか。もちろんレベルの高いクラスでは、全員合格すればA評価をし、レベルの低いクラスではD評価してもよいのではないか。誰がレベルの低いクラスを担当するのかが問題になろうが、それはやはり、経験豊富な年長教授ということになるのではあるまいか。すべてに平等に教育するという姿勢を大学はとれなくなっているし、取らない方法を教えていけないといけないと思う。(50才代)

38: (Q6について) (5)へのコメント: 文章の頭から理解して行くスピード。

英語プラスもう一つの外国語を自由に使える人が当り前に求められている時代であることを、学生たちも十分認識していると思います。(50才代)

39: 教官や教室の絶対数不足は学部でも同じです。私も80人や120人の授業でなく、できれば40人程度の授業をしたいと思ってます。(50才代)

40: Q3とQ16の両項目については、実情の分からない私には判断の下しようがありません。「分からない」の項目を設けるべきだと思います。

Q11については、Q10の(3)以外の答えをした人にも、意見があると思います。アメリカ語学研修にも単位を与えるべきか否かについての設問があってしかるべきだと思います。(60才代)

〈農学部〉

41: 中学3年高校3年大学2年(専門でも英語をすると4年)。それだけ英語を学んでいるにもかかわらず、大勢の人(私も含まれるが)が、話せない書けない聞き取れないというのが現状だと思う。かろうじて辞書を引きながら文章が読める程度なので、せめて大学では、もう少し話することができるような教育を望む。(30才代)

42: (Q20について) 希望しない人まで無理に受ける必要はない。

(Q19について)「選択肢5:そんなことは自由である。いくらでもよい」を追加する。NHK等の語学教育番組などを参考にされて、つねに改革改善の努力をされるよう切念します。(30才代)

43:大学における語学教育(特に英語)は、基本的には専門課程の教官が責任をもって行なうべきだと思う。学生と話してみると、残念ながら教養課程の授業、ことに語学はあまり評判がよくない。とりわけ中間試験の存在は、(行なわない人もいるようだが)「我々を高校生扱いしている」と感じる場合が多いようである。(30才代)

44:再履修のためのカリキュラムを組まないで頂きたい。(40才代)

45:語学の再履修の時間には反対である。今後、是非検討して、なくして貰いたい。(40才代)

46:理系専門分野における英語の重要性は、ますます高まっています。また社会においても、世界共通語は英語以外に考えられません。従って、読み話すことの両面の教育が重要と考えます。関係ありませんが、フランス語ドイツ語は理系全ての分野で駆逐されつつあります。これからの世界では、スペイン語が英語について重要な言語になるのは、間違いありません。(40才代)

47:(Q5について)個人差が大きく、一概に言えない。

(Q21について)教官増員が難しい状況で、教育の質をあげようとすれば、致し方ないと思う。

(Q23について)心情的には賛成であるが、専門カリキュラム過密で無理がある(獣医)。

英語は手段であり、英語を通して何を教えるのか教えたのかが重要であると思っています。その意味で、先生がたの個性をもっと前面に出せるような授業システム(小人数, 選択性)が望ましいと思います。教養時代にB. マラマッドを一年間習い、それが契機でユダヤ人作家を読みあさった個人的経験を、今でも大切にしています。(40才代)

48:(Q14について)「選択肢5:教師による」を追加する(非常勤でも真面目な人はいる)。

(Q18について)「選択肢5:英語が主体でよい」を追加(ドイツ語が多過ぎる。むしろ海外協力の面から、スペイン語ロシア語フランス語中国語ハングル語のほうが大切)。

(Q19について)「選択肢5:徹底して英語ができればよい」を追加する(その他は選択可能として、今あげた上の仏独などがあればよい)。

(Q21について)「選択肢5:単位数よりも、教授法・教育内容の問題と思う」を追加する。

英語は第一で他は大切でないという意味でなく、実際問題として英語力は重要である。英語二分の一、他は選択で二分の一の教官構成・時間数でよい。

問題は、英語の重要性を学生にいかに早く分からせるか、であろう。現在の教養部の教授法では、とても実力はつかないように思う。大学全体として、一年生の時から専門でも英語の教科書を使うなどのことをしないと、学生に分らせることは無理と思う。大学の単位数を多少増やしても、解決しないのではないか。問題は、学生の意識を前向きに変えることでしょう。

今の英語の内容教授法のみで実力をつけることは、無理でしょう。(40才代)

49：とくに理系分野の場合、今後、英語ならびに数学はきわめて重要な基礎教科となるので、いっそうの充実が不可欠と思います。(40才代)

50：専門の文献（英語）の読解能力は、会話力のある者が優れているような印象を受けます。会話力の充実が必要では？(40才代)

51：(Q20について) 選択制でなく全員の学生に、小人数で密度の濃い授業をして頂きたい。(40才代)

52：(Q5について) [？自分の] 講義が英語の学力に依拠していないので、答えようがない。

(Q6について) 全体が当てはまる。英語的には、主語述語の関係が分かっていないようである。結局は日本語の構文を知らない、ということかも知れない。

(Q12について) 必修である必要を認めていないので、数の多少については、Q15との関連で決まる。

(Q19について) 「べきか否か」は答えられない。学ぶ側の問題である。

(Q21について) Q20との関連。取りたい者はもっと取れる。

(Q22について) 原書は外国語で書かれていているという時代ではない。[？原書講読ではなく] 外国書講読である。

(Q25について) 分からない。しかし、今後論議すべきである。外国語という語学の習得ということで、ノウハウを開発して指導して欲しい。多くの人は中高で6年間、大学では4年で10年間英語教育を受けて、英語でコミュニケーションできないということを、多くの外国人はほとんど理解できない。大学というのではなく、日本の英語教育自体が、どこかに欠陥があると思えない。(50才代)

53：スピーキングとヒアリングの機会を多くして欲しい。(50才代)

54：技術的には難しいことではしょうが、本格的な辞書（たとえば研究社の大英和）を使って、じっくりと読解する姿勢が身につくような指導を希望します。(50才代)

55：(Q6について) 基本的には、英語力の不足によると思われるが、言語が意志伝達の一つ的手段であることを理解しておらず、原文に惑わされていることが多い。したがって回答としては、1と2を併せたものと理解して欲しい。

(Q16について) 現状が不明なので回答不能。(50才代)

56：情報伝達技術を習得するセンターとしての役割を期待する。(50才代)

57：実用性にも考慮して、新聞等も読めるようにお願いしたい。文学書に偏らないことが、理系学生に必要な。卒業後、外国でコミュニケーションに不自由がないように。(60才代)

58：教材そのものを再検討する必要があるのではないのでしょうか。鳥取大学でどのように英語教育が行なわれているか、実態を私はよく知りませんが、少なくとも私自身の経験では、英語教師側の専攻の関係のせいか、

教材は文学作品に限定されており，このことは，将来，医工農学部系統に進む者にとって何等の役に立っておらず，興味を著しく削減するものであった。一般教養における英語教育は，教養課程と専門課程の橋渡しの役割を果たす意味で，教材をもっと拡大し，医工教の各学部向けの内容にすべきだと思われる。(60才代)

最後に本調査にあたっては多くの方々の御協力をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。